



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3297 号 2016.10.7 発行

社説：社会保障論戦 負担の議論も一体で

朝日新聞 2016年10月7日

連日の国会審議で、年金の給付抑制や介護サービスの縮小をめぐる議論が活発だ。急速な少子高齢化に伴う社会保障財政の悪化は放置できない。与野党がその懸案に向き合おうとするのは前進だろう。

しかし、給付・サービス抑制の是非を巡る応酬が目立ち、国民の不安に応える論戦になっ
ているとは言いがたい。解決策を探る努力をしてほしい。

年金で焦点となっているのが、支給額の改定ルールの変更だ。これまでは物価が上
がれば年金も引き上げてきたが、現役世代の賃金の動向も加味して抑制できるようにする。

見直しのための法案には、保険料を納める働き手の減少や平均寿命の伸びに応じて、給
付を抑える仕組みを徹底するための措置も盛り込まれている。

ともに、年金財政の厳しい見通しを受けて決まった案だ。立て直しを怠れば、しわ寄せ
は将来の世代が受けることになる。先送りできない課題である。

ただ、安倍首相も「(給付抑制は) 必要な改革だ」と繰り返すだけでは済まされない。年
金細っていく時代に、とりわけ低所得の高齢者の暮らしをどう守るのか、説明は十分で
ない。

年金だけでなく医療や介護、他の福祉政策を含めてどんな対策を講じ、そのための財源
をどう確保するのか。掘り下げるべき論点はそこではないか。

介護保険をめぐるのは、厚生労働省の審議会で、要介護度が低い人向けのサービスの見
直しなどが検討されている。

これに対し野党は、サービスが利用できなくなれば家族の負担が増すとして、「『介護離
職ゼロ』に逆行する」と批判を強めている。制度見直しのたびに介護保険を利用しづら
くなっていると感じ、野党の主張にうなずく人も少なくないだろう。

ただ、年々増え続ける介護の費用をどうまかなうかという重い問題が横たわる。

支出を抑えてやりくりするのに無理があるとすれば、収入を増やすしかない。保険料を
納める対象者の年齢を今の40歳から引き下げて制度の支え手を増やす。介護保険制度へ
の税金の投入割合を高める。そんな議論も避けられないのではないか。

これらは、消費税率を10%にしても、さらに財源を考えねばならない問題だ。国民的
な合意をどうやって作っていくか。

給付と負担を合わせて考えるというのが、自民、公明、民進が主導した「社会保障と税
の一体改革」の理念だった。その基本姿勢に立ち返って、議論を深めてほしい。

「相模原事件にみる差別の裏側」(前編) ~ 姜尚中 (政治学者)

日経ビジネス 2016年10月4日

気鋭の若きフォトジャーナリスト安田菜津紀の「未来への扉」対談シリーズ。日本を代
表する論客で政治学者の姜尚中氏をゲストに迎え、国内外の多様な問題について話を聞い
た。

今回は 7 月に起きた神奈川県相模原の障害者施設における大量殺傷事件や、選挙という場を利用したヘイトスピーチなど、差別を巡る問題について。なぜ障害者を標的にした大量殺傷事件が起きてしまったのか。

姜尚中氏はこうした事件や出来事の背景には、マルクス主義でうたわれた「生産力思想」があると見る。こうした事態に我々はどう対応したらいいのか。対談を通じて探った。



(構成＝高島三幸 対談写真＝村田和聡)

あまりにショッキングだった相模原の殺傷事件

姜 あの相模原の事件は、あまりにショッキングでした。19人が殺害され、27人が負傷しました。これだけの数の人間を殺傷するというのは、どれだけのエネルギーが必要になるのか。凶器を複数持っていたとしても、短時間でこれだけの数の人間を殺傷するのは普通できないでしょう。どうしてそこまでの殺人マシンとなれたのか。

彼自身もナチスからは抹殺対象となる矛盾

姜 相模原の事件は、知的障害（重複障害）がある方を集中的に狙ったわけですが、「障害者なんていなくなればいい」と園の関係者に話をしていたこともあると言います。相模原事件の容疑者はナチスドイツを信奉していたと報道されていますが、ナチス政権下の障害者虐殺を彷彿とさせます。

【相模原障害者施設殺傷事件】

7月26日未明、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され27人が負傷した事件。元施設職員、植松聖容疑者（26）が殺人の疑いで逮捕された。事件が起こる前に植松聖容疑者が衆議院議長・大島理森氏の公邸を訪れ、直筆の手紙を渡していたことも分かった。相模原事件の容疑者が措置入院中だった2月20日、病院の担当者に「ヒトラーの思想が2週間前に降りてきた」と話していたという。措置入院時に相模原事件の容疑者を診察した医師は、当時常用していた大麻の影響と診断し、退院させた。しかし、9月14日に厚生労働省の検証チームが発表した検証結果によると、大麻の影響だけでそうした反応が出るとは限らないと結論づけている。また相模原事件の容疑者を診断していた医師の1人が精神保健指定医の資格を不正に取得していたことも明らかになった。

安田 そうですね。

姜 相模原事件の容疑者は精神保健福祉法に基づく措置入院をしていたこともあり、そうなるナチスを信奉して障害者を抹殺しようとした彼自身も、ナチスにとってみれば抹殺の対象となったという皮肉があります。ナチスは障害者、精神障害者、同性愛者など、数十万人を殺しているわけですから。ユダヤ人だけでなく、ドイツ人も殺されている。そうした矛盾にもさらされているわけです。

異質なものを排除する「純化思想」が根底に

姜 相模原事件の容疑者の考え方、感じ方の根っこには「純化思想」があるのではないかと思います。この思想がどう生まれてくるかというと、「自分たちが純粋だから汚物と触れるのが怖いんだけど、自分たちが純粋であるという確証は、自分たちが一番恐れる汚物という存在があるから」という、矛盾したものなんです。

自分たちは純粋だという確信は、ある種の異質な他者に対する「フォビア（嫌悪）」との関係性の中でしか持てない。それは拙著『悪の力』（集英社新書）にも書いてあるんだけど、ナチスドイツの中にある悪っていうものは、よく突き詰めていくと空虚なんです。だからこそ、そこには我々を汚染するものがあるから、それを排除しないと自分の存在自体がおかしくなってしまう。

安田 相模原の事件によって、精神障害を抱える方々に対する偏見やバッシングが助長さ



れてしまったように思います。

姜 そうですね。ただ、彼にはそうした自覚はない。彼の言説をみると、なぜか最後はビューティフルジャパン、安倍首相が掲げている「美しい国」に行き着く。彼によるといまは国家の危機に陥っていて、これを自分が除去することで美しい国が実現する、つまり自分はヒーローなんだという思い込みです。



障害者の立場を追い込む「生産力思想」

姜 「ジハード（聖戦）」を叫んで、フランスやドイツでテロに走った 20 代の若者たちと根本的に違う。ジハードを叫ぶ若者たちの敵は異教徒であり、自分は肉体的に死ぬということを感じている。しかし、相模原事件の容疑者は、自分が生き残れば当然国家から表彰を受けて、2 年くらい経てば無罪放免になって釈放されると頭の中で思い描いている。これはもう「パラノイア（偏執病）」の世界ですね。

僕は相模原の障害者施設の事件の根底には「純化思想」と同時に、根強く横たわる「生産力思想」というのがあるのではとも思うんです。

もともと翻訳家で、『求めない』（小学館文庫）という老荘思想的な本を書かれた加島祥造さんと話したことがありました。彼は 92 歳まで生きられたんですが、「姜さんが東日本大震災があって日本が変わるかもしれないというのは分かるけれど、死者行方不明者を入れて 2 万人くらいでこの国が変わるとは到底思えん。自分も行った太平洋戦争では 300 万人が死んだけれど、日本は変わらなかった」と驚くべきことを話すんです。僕はその言葉を聞いて、すごく抵抗がありました。

その考え方の根底にあるのも「生産力思想」なんです。死者を 2 万人と 300 万人という数で比較してしまう。僕がマルクス主義にどうしても違和感があったのは、その生産力思想でした。「生産関係が生産力を制約して、生産関係が不平等だから本来の生産力が生かされない。だから生産関係を変えればよい生産力が増していく」という考え方です。学生時代に僕が左翼に行かなかったのも、その考えに違和感があったからで。

生産力思想が遺伝学、衛生学、優生学と結びつく

姜 その生産力思想というのは、実はかなり根深い。それは一足飛びに今日の話にもかわってくるけれど、「障害者の人たちは生きる価値がない」というのは、「生産性に貢献しない者は生きる価値がない」という考え方で、それは遺伝学と、衛生学、優生学が結びついた結果です。

ナチスドイツはその思想を国家ぐるみで押し進めた。そういう考え方がやっぱりどうやら一部であるにせよ蔓延していて、そこまで排除せよとか、抹殺せよといわなくても、生産性に貢献しないのはどこか余計だよねという考え方が今の社会に広がっているのではないのか。これを言ってしまうと建前として、人から揶揄されるからなかなか口に出さないが、そういうようなことを考えている人が実はかなりいるんじゃないかと思うんです。



安田 生産性を効率性に置き換えることもできます。効率性という軸で、「そこから上は必要な人間」「そこまで到達しない人間はいらない人間」という線引きがなされて、それも大きな生きづらさにつながっていると思うんです。

ナチスのお話が出ましたが、ある時「優生保護法」が平成 8 年まで法律として存在していたことを知って驚いたことがあります。その後、この法律の“被害者”の方のお話を聞く機会があったのですが、自分の意に反して、子どもを産めない手術をされたり、優生保護法で対象となっていない障害にもかかわらず、無理やり手術をされた方もいらっしゃいました。

【優生保護法】

1948 年（昭和 23 年）に制定された優生保護法では、遺伝性疾患だけでなく、ハンセン氏

病や「遺伝性以外の精神病、精神薄弱」を持つ患者に対する断種が定められた。優生保護法に基づく強制的な優生手術は1万6500件、同意に基づく優生手術は80万件以上にも上った。この優生保護法は1996年（平成8年）の改正で母体保護法に法律名が変更され、障害者およびハンセン病患者への強制的な優生手術に関する条文が削除された。

国家的犯罪とも言える「優生保護法」

安田 被害者の方が声を上げて、国際社会に訴えたことで、国連の女性差別撤廃委員会が今年3月に優生保護政策で障害を理由に不妊手術を受けさせられた人への補償するよう、日本政府に勧告しています。しかし、いまだ国としてはほとんど何もしていない状況です。

これは被害者と国の問題と思われがちですが、そもそも法律がああいう形で存在できたというのは、「社会の中で障害がある子どもたち」＝「生まれても不幸になってしまう子どもたち」という、どこか安易な価値観を社会が黙認して、無自覚的に引きずり続けていることが原因だと思うんです。だから相模原の事件を起こした容疑者を、ただ異常だ、異質だと切り捨てるだけではなにも始まらない。同じことが繰り返されてしまう危険性があると思うんです。

「相模原事件にみる差別の裏側」（後編）～姜尚中（政治学者）

日経ビジネス 2016年10月5日

政治学者の姜尚中氏とフォトジャーナリスト安田菜津紀氏が相模原事件の深層に迫る後編。相模原事件の容疑者は、なぜ障害者問題を国家論にまで飛躍させたのか。「生産力思想」が「純化思想」と結びつくとき、ナチスドイツが第2次大戦下で引き起こした「エスニッククレンジング」（民族浄化）にまで至る危険性に論を進める。

さらに、夏の都知事選で民主主義国家にあるまじきヘイトスピーチが突如湧き出て、それに多くの国民が支持を表明したのはなぜか。また、アメリカ大統領候補のドナルド・トランプ氏は、しきりにイスラム教徒への差別的な発言を繰り返している。このような差別の裏側にあるものを探った。

（構成＝高島三幸 対談写真＝村田和聡）

容疑者を隔離しようとする言説への違和感

安田 いま、大きな悪循環が生まれてしまっていると思うんです。今回の事件に特化していえば、容疑者がかつて精神的な病によって措置入院となっていて、その後2週間ほどで病院から出てきています。

「なぜ彼を出してしまったんだ」「なぜもっと隔離をしておかなかったんだ」という言説が目立ちます。でもそんな言葉に対する違和感は強まるばかりです。

恐怖感が増大していったときに排他性が生まれる

安田 結局いろんな生きづらさを突き詰めていったときに、姜さんが『悪の力』にも書いていらっしまった、「社会との分断、効率性というラインがあって、そこからこぼれ落ちてしまって、自分は社会からは必要とされない」という感覚が生きづらさを増幅して、何かの形で爆発してしまったときに、取り返しのつかない事件が起きてしまうかもしれない。

そこで私たちは恐怖感をあおられたりするわけですよ。恐怖感が増幅していったときに、たとえば排他性が生まれたりですか、何か大きな力に守ってもらいたい、という傾向が強くなったりしていくのかもしれない。

姜 その通りだと思うんですよ。相模原事件の容疑者の



場合、一足飛びに国家に飛躍している。この点が非常に重要で、どこまで精神障害と関わっているのか。ある種これが「エスニッククレンジング（民族浄化）」になってしまうんですね。

ナチスドイツがやったユダヤ人の大量殺りくは、史上最悪のエスニッククレンジングだったと思うし、それに近いものはヘイトスピーチにもある。アメリカではトランプ氏によって、ある種の宗教集団やヒスパニック系の特定の人に対してそういう発言が出る。ヨーロッパでも陰に陽にそういう問題が出てきている。

グローバル化が憎悪を拡散することに

姜 結局今起きていることは、グローバル化という現象を通じて、憎悪が広がり、それが僕たちに襲い掛かっている。かつてはグローバル化という言葉には、学者の世界ではオプティミスティック（楽観的）な響きがある時代があったんですよ。いいことじゃないかと。越境的になって、「ハイブリディティ（異種混交性）」というのが起こって、それがこれから先のひとつのトレンドになるんだと。グローバル化によって国民、国家の縛りが緩んでくるのではないのかと。



そして僕なんかも、いくつかの領域がせめぎあっているけれど、それを複合的に生きる、「複合的アイデンティティ」みたいなものが生まれると思っていた。そのときちょっと僕は甘かったんですね。でも、マイノリティの立場の方からすると、グローバル化はひとつの国民国家やナショナリズムのあとにくる、国家の求心力をどんどん薄めていく、そういう力ではないかと。それが文化や人々の意識を変えていくと思われていた。

でもいまはっきりしているのは、グローバル化で勝利するのは資本だけなんですね。資本だけが利潤追求のために、ありとあらゆる差異を一方で作り出しながら、一方で壊していく。資本というのは差異のあるところで増殖するわけです。

例えば金利の違いをうまく活用して、日本の金利とアメリカのドル金利が違えば、そこをうまく活用して、安くお金を借りて、金利の高いところで儲ける。グローバル化は差異をどんどん縮減していくと思ったら、そうではなくて、壊しては差異を作り出し、またその差異を壊しては作り出す。資本だけが一番グローバル化している。しかし、人間や文化は、実はそうならない。

ヘイトスピーチの背景にある閉塞感

安田 既存の国家の枠が薄まっているというお話をされたんですけど、いまの日本の中の傾向をみていくと、国境という絶対の境界でないものを、むしろ濃くしていくような、そんな息の詰まるような状況が増幅されているような気がするんです。

今夏の都知事選でも、だれが都知事になるということより、ヘイトスピーチを繰り返している人がどこまで票を集めていくのかが気になりました。口に出すのものはばかれるような言葉で、在日、朝鮮人の排斥を叫ぶ候補に票が集まっていく。

姜 10万以上は集めたのではないですかね。

安田 そうなっていましたね。

姜 外国人の留学生に対しても、留学へのスカラシップをなくせという。ヨーロッパでもかなり近い現象がみられているんですが、日本の場合に特異なのは、ヘイトスピーチではなくてハラスメントだと思うんです。それが日本の場合、適度な範囲では収まっていない。

それ以上にベースにあるのが、障害者に対する差別で、それが相模原の事件で色濃く出てきたと。やっぱり自分たちがどこか異質だという存在を特定していかないと、自分たちの存在が溶解していく。自分たちが憎んだり、否定したりしている存在がいることで自分たちがいることが確証できる、求心力が働く。そういうひとつのリアクションとして起きていて、個々の彼らがどうしているという問題もあるんだけど、それよりシステムとしてそういう



状況が作られている。なので排除することが難しい。

安田 深刻な問題ですね。

なぜトランプ候補はイスラム教徒を排斥するのか



姜 日本はフォビア（「嫌悪」や「忌避」）を作っ
て、それによって自分の存在を確かめようとして
いるけれど、実はこの 20 年間でグローバル化が
一挙に進んで、その中で日本という国のポジショ
ンが非常に危うくなっていることの表れでもある
のではと思うんです。

安田 ポジションの低下がヘイトスピーチを招
いていると。

姜 アメリカの大統領選挙で、ドナルド・トラ
ンプ候補がしきりにイスラム教徒を排斥しようと

する言動を重ねているのも、アメリカという国の立ち位置が相対的に低下して、ある種の閉塞感がそこにあるからではと思うんです。

僕は先日取材で中国の大連を訪れたんですけど、そこで日本人排斥とか、運動として起きているかといえば、起きていない。もちろんネット上に反日的な言説はやられているけれど、もう一方でリアルな言動で一つの集団となって、向こうに住んでいる日本人たちに対して、ヘイトスピーチが実際に誰かがある場所にきてやっているかといえば、それは起きていない。

中国の反日運動の真実

かつて中国は反日運動というので、商店街、デパートに不買運動をしてやっていたが、あれは尖閣諸島を巡る問題と、北京政府がかなり煽り立てた部分があった。じゃあ、個別的に何かは起きているかという、実はぜんぜん何も起きていない。

僕が大連に行って改めて思ったのは、日本人と中国の地元の人との関係は人間的には非常に良好な関係ということです。だから、ヘイトスピーチがなぜ起きているかは、日本の閉塞感と日米関係を考えないと理解できないと思います。



【プロフィール】

姜尚中（カン・サンジュン）

1950 年、熊本県熊本市に生まれる。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。国際基督教大学助教授・準教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授、聖学院大学学長などを経て、現在東京理科大学特命教授。今年 1 月から熊本県立劇場館長に就任。4 月から長崎県諫早市の鎮西

学院で教育顧問も務める。専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。

主な著書に『マックス・ウェーバーと近代』『オリエンタリズムの彼方へ』『ナショナリズム』『東北アジア共同の家をめざして』『増補版 日朝関係の克服』『在日』『姜尚中の政治学入門』『ニッポン・サバイバル』『愛国の作法』『悩む力』『リーダーは半歩前を歩け』『あなたは誰？私はここにいる』『心の力』『悪の力』など。共著に『グローバル化の遠近法』『ナショナリズムの克服』『デモクラシーの冒険』『戦争の世紀を超えて』『大日本・満州帝国の遺産』『世界「最終」戦争論』など。編著に『在日一世の記憶』など。小説『母オモニ』『心』を刊行。最新刊『漱石のことば』。

安田 菜津紀(やすだ・なつき)

フォトジャーナリスト



1987 年神奈川県生まれの 29 歳。studio AFTERMODE 所属。シリア、イラク、ヨルダン、ウガンダなど、東南アジア、中東、アフリカの取材を進める。

日本国内でも東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。2012 年、「HIV と共に生まれる -ウガンダのエイズ孤児たち-」で第 8 回名取洋之助

写真賞を 25 歳で最年少受賞。近著に『君とまた、あの場所へ：シリア難民の明日』（新潮社）、陸前高田で出会った漁師と孫を主人公にした写真絵本『それでも、海へ 陸前高田に生きる』（ポプラ社）。現在は日曜朝の報道番組「サンデーモーニング」（TBS 系列）に月 2 回コメンテーターとして出演。ラジオ番組「JAM The World」（J-WAVE）では毎週水曜のパーソナリティを務めている。上智大学総合人間科学部教育学科卒。

共生社会実現に向けた県憲章制定へ やまゆり園事件受け 東京新聞 2016 年 10 月 7 日

相模原市緑区の県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」での殺傷事件を受け、黒岩祐治知事は六日の県議会予算委員会で、今定例会中に、共生社会実現に向けた憲章を制定する考えを明らかにした。

県議会では、障害の有無にかかわらず共生する社会をうたう新たな条例策定を求める意見が出ていたが、条例化には法令との整合性を図る作業や、県民意見を聞くパブリックコメントなどの手続きが必要となる。このため時間がかかることが、課題として指摘されていた。

黒岩知事は「ともに生きる社会を実現するための方向性を一日も早く示し、県全体で共有して全国に広げることが大切。早急に憲章の考え方をまとめたい」と答弁した。県全体の意思であることを示すため、県側が提案し、議会が議決する方式とする。（原昌志）

メディアと障害者像＝望月麻紀（東京学芸部）



毎日新聞 2016 年 10 月 7 日

相模原殺傷事件の追悼集会。メディアの障害者像を疑問視する意見も出た＝東京・参議院議員会館で9月26日、望月麻紀撮影

安易な感動物語、脱却を

今夏、メディアが伝える障害者像が「一面的だ」と当事者が声を上げ、差別につながると批判した。NHKがEテレで放送している情報バラエティー番組「バリバラ」の8月28日放送でのことだった。

パターン化が生み出す

差別

番組では、オーストラリア人の女性ジャーナリストでコメディアンのスセラ・ヤングさん（1982～2014年）が、障害者を感動の対象として取り上げる映像や写真を「感動ポルノ」という言葉を使って批判したことを紹介。スタジオでは、障害者相談支援専門員で脳性まひの玉木幸則さん（48）が「（障害者と健常者が）同じ人間として怒ったり笑ったり、思いを重ねることがホンマの感動。一方的な感動の押しつけは差別だ」と話した。

初のロボット工学と障害者の国際大会に和歌山大チーム出場 産経新聞 2016 年 10 月 7 日

最先端のロボット工学技術を駆使して障害者が競技に挑む初の国際大会「サイバスロン」が8日、スイスで開催される。県内から「電動車いす」部門に和歌山大チームが出場。車いすに乗って操作する“パイロット”は、北京パラリンピック車いす陸上の金メダリスト、

伊藤智也さんが務める。

大会は、義手や義足、パワードスーツなど6種目で、同大チームは電動車いす部門に参加。同部門には、11カ国12チームが参加する予定という。階段やスロープ、スラロームなど6種類のコースが設定され、精度や速さが競われる。

出場するのは、システム工学部の中嶋秀朗教授と学生らの研究チーム。チームが約1年間かけて開発した電動車いす「P T y p e - W A」を使用する。アルミ製で軽量化され、重さは約80キロ。4つの車輪は別々に動き、車体の傾きを測定するセンサーで座面を水平に保ちながら段差を乗り越えることができる。

先月末には、和歌山市栄谷の同大で、デモンストレーションを実施。スロープや階段を難なく乗り越える姿に、驚きの声が上がっていた。中嶋教授は「大会で実力を出し切りたい」と抱負を述べた。

また、操作する伊藤さんは「座席が常に水平なので、とても安心」。大会での結果が実用化へのステップにもなることから、「通常、車いすは特注することが多く値段が高い。実用化し大量生産されるようになれば、結果的に低コスト化につながるようになるのでは」と期待をかけている。

三田の特別支援学校ソフト部 近畿で優勝、全国へ 神戸新聞 2016年10月7日



全国大会出場に向けて意気込むソフトボール部の選手ら＝三田市大原、県立高等特別支援学校

兵庫県立高等特別支援学校（三田市大原）のソフトボール部が初めて近畿大会で優勝し、22日から岩手県花巻市で開かれる第16回全国障害者スポーツ大会に出場する。在校生と卒業生、さらに県立播磨特別支援学校（たつの市）の生徒も加わった特別編成のチーム。選手らは全国制覇を目指し、練習に励んでいる。

5月の県大会では3連勝で5年ぶりに優勝。2位の播磨特別支援から4人を強化選手として迎え入れた15人のチームで、6月12日に10校が戦った近畿大会でも優勝し、初めて代表校に選ばれた。全国大会出場は、地元枠で出た2006年の兵庫大会以来2回目。

県内各地から知的障害のある生徒が通う高等特別支援では、1996年の開校とともにソフトボール部が発足。現在は1～3年生13人が所属するのに加え、卒業生も生涯スポーツとして継続できるよう受け入れている。同大会の規定で卒業生も参加できる。

藤田純一監督（28）は大学や社会人チームで活躍した後、同校に着任。障害に配慮し、短く具体的な指示やパターン化した練習メニューでわかりやすく、生徒の安心感につながるよう心掛けている。

一般校との練習試合にも積極的に取り組み、実戦感覚を高めてきた。バッティング練習では、通常より近い場所からテニスボールを上投げ。部員たちは速球への対応力を磨き、打率が飛躍的に向上したという。

主将で3年の村沢駿さん（17）＝西宮市＝は小中学校時代にクラブチームで野球に組み、同校でソフトボールに転向。「障害に関係なく、勝利を目指す心は一つ。みんなで優勝目指して頑張る」と意気込む。（神谷千晶）

